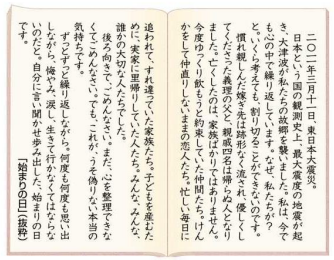


シリーズ100回 記念フォーラム



「未来へ伝える私の3.11」BC岩手放送局から

悔やみ涙し生きて行かねばならない



被災者手記を朗読するいとうまい子さん
=いづれも古原市千種区の名古屋大で



「悔やみ涙し生きて行かねばならない」の朗読者いとうまい子さん

被災地の記者たちと題した座談会では、東日本大震災で手書きの「壁新聞」で発行を続けた石巻日日新聞(宮城県石巻市)の外処健(報道部長)、河北新報(仙台市の須賀野報道部長)の須賀野(編集長)、阪神大震災で本社が全壊した神戸新聞(神戸市の長沼秀三)の須賀野(編集長)が、震災の教訓や災害報道の課題を話し合った。進行役は本紙防災面担当平岩勇司(以下、敬称略)。

「被災地の記者たち」座談会

平岩 三人は震災で被災取材して、今も悲劇と教訓を語り継ぐことになっておられる。外処 震災が起き、社長から「壁新聞書け」と言われて、正真正正「壁新聞」を書いた。時代は変わって、宮城県地震が来る(宮城県)ながら、危機管理ができていません。でも、ペンと紙があれば伝えられるのではないかと、地元紙がこういう時に情報を出さないでどうするんだと、みんな死んで情報を集め、新聞のローカル紙に油性ペンで書きました。

石巻日日新聞 避難所に張り付いた時は恥ずかしかったです。「ういことしかできなくて、びんをこい」といふのがありました。今、食べ物も何もない、どんな情報でもいいからとにかく載せて」と言われたのが励みでした。須賀野 震災後の訪察アンケートで、(事前)河北新報の防災報道が役立ったとかの返答に、「役に立った」という回答は三割弱でした。社内で検討し、防災の体験型講座「むすび熟」を始めました。防災の専門家が進修、震災の時にどんな体験をしたか、その地域でどんなことが必要かを話し合っていました。

壁新聞期待の声が励み

津波の教訓を替え歌に むすび熟は東北の被災地以外でも開いています。家を遠くまで参加してもらえ、チェックシートも作りました。「どんな

長沼隆之さん 神戸新聞
須藤 宜毅さん 河北新報
外処 健一さん 石巻日日新聞

街が一瞬でつぶれました。被災地で起きたことを見て、考えて



座談会で、東日本大震災や阪神大震災について話す(左から)神戸新聞の長沼隆之さん、河北新報の須藤宜毅さん、石巻日日新聞の外処健一さん

減災へ

非常用袋持ち出した人は何割? 防災クイズで実感

イベントの締めくくりに市民らが名古屋大減災連携研究センター長の福和伸也教授の解説で防災クイズに挑戦し、知識を深めた。「東日本大震災の時、岩手県陸前高田市の避難所に非常用袋を家から持ち出した人は何割だったか」など4択の問題で、来場者が

- 主な質問と答え
- Q 地震の規模を表すマグニチュード。数字が1増えると地震の大きさはどれくらい違う? A. 32倍
 - Q 津波が陸地をよじ登った高さを表す「遡上高」は、東日本大震災では最大で地上何メートルに達した? A. 40m
 - Q 太平洋戦争末期に起きた昭和東南海地震と三河地震。死者と行方不明者は計3500人以上。上はなぜ被害が公表されなかったのはなぜ? A. 軍事機密扱いとされたため



防災クイズに参加する来場者